社会

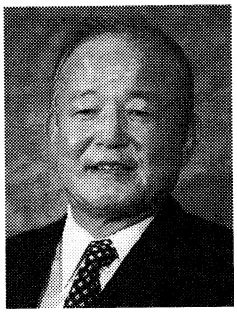
「国際親善よりお世継ぎ」が持論
元宮内庁長官・鎌倉節氏が逝去

第七十五代警視総監で、宮内庁長官として香淳皇后の葬儀の大喪儀委員長を務めた鎌倉節（さだめ）氏が、八十四歳で亡くなった。警察庁担当記者が言う。

「東大法学部を卒業し、一九五四年に警察庁入りした鎌倉さんは、警察キャリアのエースとして王道の警備・公安畑を歩み、警視庁公安部長を経て、警視庁の副総監、警視総監へと上り詰めました。総監時代には、対共産圏輸出統制委員会（ココム）の協定に反して旧ソ連に軍事物資を不正輸出していた、いわゆる『東芝機械ココム違反事件』の捜査を公安部に指示するなど、辣腕を振るいました」

警備・公安警察は、共産主義勢力やテロリストの捜査を担う一方で、皇室の警備を重要な任務とする。ある警察官僚OBは「鎌倉さんの皇室への尊崇の念は、ただならぬものがあった。宮内庁長官には、なるべくしてなったと言えるでしょう」と述懐する。警察官僚としての鎌倉氏の人物評は「もののふ（武士）」。皇室警備を担う武官という自負が強かったため、「明治天皇に殉死した陸軍大将・乃木希典とイメージがダブる」とまで言う警察関係者もいるほどだ。

尊敬を集める〝侍〟だった



鎌倉氏が宮内庁次長に就任したのは九四年のこと。皇太子が雅子妃と結婚された翌年だ。宮内庁関係者が振り返る。

「男系男子による皇位継承を絶対視する鎌倉さんは、なんとしても雅子さまに男の子を産んで頂きたいという意識が強かった。だから、次長時代の皇太子ご夫妻の中東訪問にも反対だったと言われています。長官就任後は一貫して『国際親善より男子出産が優先』というのが持論でした。残念ながら流産となってしまいましたが、雅子さまにご懐妊の兆候があることが明らかになった九九年は、鎌倉さんの長官時代です。鎌倉さんの強いリーダーシップが、背景にあったというのが定説です」

外国生活が長く、自由な環境で育った雅子妃と鎌倉氏が、ときに意見を対立させたであろうことは想像に難くない。

「鎌倉さんが長官を退任したのは二〇〇一年。皇太子さまの人格否定発言は〇四年です。直接は何の関係もありません。ただ、退任後も『鎌倉さんの考えが正しい』という〝鎌倉イズム〟が、庁内に根強く残っていた中で、あの発言が飛び出したのは事実です」（同前）

雅子妃は鎌倉氏逝去の報に、何を感じられたのだろうか。

国際

慰安婦問題で
米国から異色の
経歴の援軍登場

慰安婦問題で、日本にとって強力な援軍となりそうな人物が現れた。マイケル・ヨン氏（49）である。同氏は米陸軍特殊部隊（グリーンベレー）出身で、二〇〇四年からイラクで米軍部隊への「埋め込み（エムベッデッド）」従軍記者活動を開始。フリーのジャーナリストとして、ブログを通じて発信する迫真の報道が全米で評価を得ている。

写真報道も手がけるヨン氏は〇五年五月、米軍将校が自動車爆弾で重傷を負ったイラク人の少女を抱きかかえる写真を撮影。これはイラク戦争の悲劇を衝撃的に描いた作品として大きな話題となった。

〇八年には「イラクの真実の時」と題する本を刊行し、全米でベストセラーを記録。同年八月には拠点をアフガニスタンに移し、ここでも最前線からの報道にあたる。その成果はニューヨーク・タイムズ、USAトゥデイなどの大手紙やNBC、CNNなどのテレビでも頻繁に取り上げられた。

ヨン氏は米軍の活動に対し、対テロ闘争と民主化という基本を支持、特に〇八年のイラクでの米軍増派計画の必要性を強調してきた。また最近では、バンコクからタイの政変も報道していた。

こうした異色の経歴を持つヨン氏が、日本の慰安婦問題に本格的に取り組み始めたのだ。米国やタイなどでの取材をすでに終え、十月に来日。多数の関係者に会い、資料にもあたっている。当初は「軍隊と性」という観点から慰安婦問題に関心を持ったそうだが、理解を深め、「日本軍が組織的に二十万人もの女性を強制連行したとする米欧大手メディアなどの断定は、虚構としか思えない」という見解を自身のブログで表明している。

米側で詳しく調査をしたというヨン氏は「米陸軍当局が戦時中の一九四四年にビルマで尋問した朝鮮人慰安婦たちも、自分たちは単なる売春婦（プロスティテュート）であって強制連行などされてはいないと証言した」と強調する。

「現在の日本はアメリカの貴重な同盟国であり、平和主義や民主主義に徹した国だ。その日本を慰安婦問題で米側が叩くのは友邦を弱め、敵性勢力を強めることになる」とも語るヨン氏。彼の発信力が、米国を中心にどこまで広がるか注目だ。

（在米ジャーナリスト・古森義久）

昨年7月に除幕式が行われた米・グレンデール市の慰安婦像